

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 鈴木 健太郎

鈴木健太郎氏の「近代日本における占いとメディア」は、明治初期から現代に至る日本の占いの知と実践を広く見渡すことによって、「そもそも占いとは何か」という宗教学的な問いを追求するとともに、メディアの発展が日本の占い文化にどのような影響を及ぼしたかを考察しようとした開拓的な意義をもつ論考である。

鈴木氏は「占いとメディア」の関係を見定めるために、いくつかの試掘的な資料研究とフィールドワークを行い、具体的な事実から浮上してくる個別の論点をあたらかぎりに鮮明に提示していく。すなわち、(1) 明治後期の占い本の歴史の中で高島嘉右衛門が果たした役割の解明(第3章)、(2) 明治末に発刊された『婦人世界』誌が昭和初期に「婦人開運相談」欄を設けるに至る経緯の究明(第4章)、(3) 大正期に発刊された『主婦之友』誌が占い記事に大いに力を入れた後それを縮小させていく経緯の究明(第5章)、(4) 現代の大都市の占い館の顧客達がどのような人々であり何を求めているのかについての調査研究(序章)、(5) 現代の「占い本」がどのような特徴をもちどのような占いの方法を説いているかについてのサーベイ(第1章)、などである。

これらはいずれもほとんど先行研究のない領域にいわば素手で踏み込み、事実即して「占いとは何か」「メディアが占いにどのような作用を及ぼしたか」を解明した論考であり、それぞれに刺激的な問題提起に結実している。全編を貫く論点として、①近現代の占いは基因と対処法の双方を比較することにより3つの類型に類別できること、②占いはアドホックな指導関係を構成しながら、小さく断片的な物語を生み出していくものであること、③占いが支えとする権威や、占いが生み出していく物語は、書物や雑誌が構成する共同性と深く関わりながら形をかえて今日に至っていること、などが示されていく。緻密な論証に至らず、論点提示にとどまっている箇所がまま見られるし、個々の論点が全体として有機的に結び合わされていないのも弱点だが、新たな研究領域にいくつかの理論的展望を切り開き、今後の研究の足場を築いた仕事としての意義は小さくない。

よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。